日独哲学シンポジウム（大阪プログラム）… 絶対的なものに即して／のあとに？

アメリカから見たドイツ観念論

エッカルト・フェルスター

小川仁志 訳

はじめに

この大会の主催者の方々は、私に「アメリカから見たドイツ観念論」というテーマで、何か話をするようにと依頼されました。この要望に喜んで応じたいのですが、私に与えられた短い時間の中では、その概略と一般的傾向を論じることしかできないことをご了解いただきたいと思います。その際に単純化は避けられないでしょうが、それが許容範囲を越えないように心したいと思います。また、一般的傾向を明らかにするために、ここではカントもドイツ観念論者であるとみなしたいと思っています。——アメリカの側から見る場合、このことはいずれにせよ自明のことではあるのですが。

近年アメリカでは、ドイツ観念論者がかつてない程の関心を集めています。この事態はいかに解されるべきでしょうか。どのようにしてこのようなことが起こりえたのでしょうか。

ドイツ観念論者のような、自らの固有の文化に特徴的で、またその文化にあまりにも深く根を下ろしている思想家たちが、全く異なる文化の中で——私たちのケースでいうと、アングロ・アメリカンの文化の中で——、現実に広範囲にわたる影響を与えているというならば、このことが可能になるのは、本来これらの思想家を受容する文化に特徴的かつ典型的で、この文化を規定している何ものとこれらの思想家が関係づけられうる場合に限られるのです。これを受容と適応の第一段階と呼びたいと思います。そしてこの第一段階の受容から自由となり、問題となる思想家の内在的解釈を探索する段階を第二段階と呼びたいと思います。

一 カント受容の二段階

このことをまずはカントの場合について説明したいと思います。もちろん、アングロサクソンの言論界には、さまざまな理

由から一貫してカントに関わってきた個々の哲学者たちが、これまで普通にいたわけであります。例えばH・J・ペイトンや、『第一批判』の英語の翻訳者であるノーマン・ケンプ・スミスあるいはルイス・ホワイト・ベックやウィルフリッド・セラーズが挙げられるでしょう。しかし、カントがアングロサクソンの言論界にはじめて広範囲にわたる影響を与えるようになったのは、ピーター・ストローソンとジョナサン・ベネットが、その当時アングロサクソンの文化圏において優勢を占めていた言語分析の論争過程にカントを組み込むことによってでした。そしてまた、このような組み込みが可能となったのも、分析哲学の陣営で、とりわけヴィトゲンシュタインによってカントの超越論的方法を思い起こさせるような（まったく同じものでもありませんでしたが）議論の仕方が普及することになったからでした。カント的な哲学と分析的な哲学とをより親密に関係づけることで、両者を互いに説明することが、にわかに望ましいことであるかのように思われたのです。かくして比較的短い期間のうちに、超越論的論証の本性——そしてそれに伴い当然カントの『純粹理性批判』——に取り組む出版物の本格的なラッシュが生じたのです。以後、分析哲学の哲学者は、恥をかきたくなければ、カントについても多少のことは知っておかなければならなくなりました。アメリカにおいてこのことは、優良大学ではやはりカントも教えることができなければならないということを含意しました。そのためのポストがつくり出されなけ

ればなりませんでした。そこで、それまでカント哲学のための講座をもったことがないような哲学科が、他の大学に後れをとらないように、七十年代、八十年代にはそのための教授ポストを設けるということが起こったのでした。今日アメリカでは、少なくともカントの専門家をもたないような一流の大学はありません。

このことが、アングロサクソンの文化圏における受容の第二段階へと導いたのです。今やカントは、より広い基礎のもとに研究され、教えられるようになりました。そして人々が集的にカントを研究するのにしたがって、第一の受容段階におけるカントは、あまりにも矮小なカント像にすぎなかったことが、次第に明らかになっていきました。というのも、そもそも第一段階においては、『純粹理性批判』だけが視野に入っていたにすぎないか、あるいは重要であるとみなされていたにすぎなかったからです。そのうえ実際には『純粹理性批判』のうちでも分析論だけに関心が向けられたのですが、それは、分析論だけが生産的な議論を含み、分析的思考に親和的だと思われたからでした。というのも、この分析論の中にのみ、——そして当然のことながら、とりわけカテゴリーの超越論的演繹や観念論論駁において——人はまさに、ヴィトゲンシュタインに端を発する分析哲学の思考法と比較できそうな議論を見出したからなのです。『純粹理性批判』の中の弁証論は、誤謬推理の章を除いて、すでに論証として維持不可能であるとか哲学的に時代遅

れであると思なされていきました。カントの倫理学、美学、目的論、歴史哲学、自然哲学——これらすべては当初、分析哲学の側からまったく顧みられなかったのですが、カント哲学を研究する制度ができたことで今ようやく、次第に視野に入ってきたのです。こうして例えばポール・ガイヤーが、彼のカント美学研究（『カントと趣味の要求』）携えて、アメリカではまったく未知の領域に足を踏み入れることができたのは、一九七九年になってのことでした。それ以来、実際カントの作品のどの部分であれ顧みられないようなことはなくなりました。今日ではアメリカにおけるカント研究はドイツにおけるそれと質的に差はありませんし、いくつかの分野においては、例えばカントの自然哲学に関しては、「ドイツに」依存しているというよりむしろ勝っているのです。約二十年前から相当数の会員を擁する北米カント学会が独自に存立しているという事実からも、カント哲学の幅広い影響を明瞭に見てとることができそうです。この学会は、年に三回のアメリカ哲学学会の大会において独自のプログラムを企画していますし、同時にまた、毎年数多くの地方の大会を開いています。またこの時期から英語版のカント全集の出版作業も進められ、ケンブリッジ大学出版会から刊行されており、間もなく完結します。全体として見れば、現在のアメリカにおけるカント研究は、ドイツよりもはるかに活発で生産的です。

二 ヘーゲル受容の第一段階

——ブラグマティズム

カント受容のこの時期にも、アメリカでは経験論的かつ分析的な哲学が優勢でした。したがって、ヘーゲルについてはからかうか、あるいは彼を哲学者として真剣に受け止めないことが、哲学者たちの間では正しい振る舞いだったのです。もちろんこの時点でも、個人的な経緯から、あるいはその他どんな理由からにせよ、彼に関心をもち、彼を重要であると捉えていた若干の哲学者たちはたしかにすでに存在しました。——例えば J・D・フィンドレーやスタンレー・ローゼンあるいはチャールズ・テイラーなどもまたここに入るかもしれません。——しかし、こうした著者たちは、自らのヘーゲル解釈によって幅広い影響を生ぜしめることはありませんでした。事態は近年になってようやく変わってきたのです。

そのような変化が可能になったのは、第一に、分析哲学自体がこの間根本的な危機に陥り、その独占状態が揺らいだからでした。このことは例えば次のような諸点に表れています。（一）分析哲学の歴史についての研究論文数が増えていることです（分析哲学の絶頂期には、分析哲学の正典に基づく歴史研究は組織的に排除されていたのです）。（二）第二にそれは、分析的思考法といわゆる大陸（ヨーロッパ）の伝統的思考法（分析哲学論者の側からは伝統的に軽蔑あるいは嘲笑をもって論じられ

てきたものですが」との親近性に関する研究論文のおびただしい数に表れています。これについては、例えばダボスで行われたハイデガーとカッシーラーとの論争に関するマイケル・フリードマンの著書が挙げられます。もともとこの論争にフリードマンが関心をもった理由は、ここに実はカルナップも出席していたためであり、最初フリードマンはカルナップの論理的経験主義と新実証主義についての論文を書くつもりだったのです。『ア・バーティング・オブ・ザ・ウエイズ』という、ここ五年ではアメリカにおいて非常に成功した本です^②。ここにはとりわけケネス・ペインズによって編集され、一九八六年にMIT出版から刊行された本、『哲学の後。終焉かそれとも変貌か?』^③のような出版物も入ってきます。これはローティーやリオタール、デイヴィッドソンやデリダ、ダメットやハーバーマス、パットナムやカール・オートー・アーベルといったさまざまな著者たちの論考を一つにまとめたものです。(三) 第三に、分析哲学の伝統そのものの根本的な目的や前提のうちに含まれる、矛盾やその他の欠点を指摘する書籍の数が増えていることが挙げられます(これについては、例えばスタンリー・カベルやジェームス・コナント、コーラ・ダイヤモンド、トマス・クーン、ジョン・マクドウェル、ヒラリー・パットナム、リチャード・ローティ、チャールズ・テイラーなどの作品が挙げられます)。

分析哲学自身の内部でのこのような発展が、異質で、これま

で無視されてきた思想潮流に対して分析哲学を開くことにつながりました。しかし、もし何人かのアメリカの思想家の見解が示すとおり、ヘーゲルの中にピットリとアメリカの文化動向に適合するような何か、つまりプラグマティズムを見出しえないとするならば、おそらくヘーゲルが幅広い人たちの興味を喚起することはなかったでしょう。このプラグマティズムは、アメリカの文化の中に深く根を下ろしているものであり、とりわけジョン・デューイのような思想家によって古典的な手法で表現されています。そしてさらに二十世紀になって、ウィリアード・ヴァン・オーマン・クワインやウィルフリッド・セラーズ、そしてリチャード・ローティのようなネオ・プラグマティストを通じて、引き続き発展させられ、深められ、現代的な関心や問題提起に合うように仕上げられてきたのです。

最近のアメリカのヘーゲル研究者たちが、自己の立場をプラグマティズムとみなす仕方や度合いは、当然のことながらケースバイケースで異なってきます。例えば、ロバート・ピピンなど、かなりの数の研究者は、カントからヘーゲルへといういわば直接的なルートをとってきました。そして彼らは、カントの主張を、特に彼の超越論的統覚に関する考察を本当にまじめに受け取れば、もう自動的にフィヒテやヘーゲルに至りつくのだと論じました。アレン・ウッドなどは大体これに当てはまります。しかし、アメリカにおいて、ヘーゲルへの新たな関心を代表している研究者すべてに共通しているのは、次の点です。

すなわち、彼らは皆、ヘーゲルの意義を（これは彼らにとって
は常に、私たちの今日の時代に対するヘーゲルの重要性、とい
うことになるのですが）、近代社会の分析及び人間の自己実現
の問題への、ヘーゲルの貢献の内に求めているということです。
そして多くの人が、思弁的思考などといったものにかかわらず
ともヘーゲルについて語れると思ひ込めるくらい、目下アメリ
カでヘーゲルが享受している幅広い影響は、ヘーゲルをプラグ
マティズムの思考方法に意識的に同化させることによって確か
に促進されているのです。ヘーゲルをプラグマティストとみる
解釈を最も強く主張するのは、『精神現象学』に関する待望の
書を間もなく完成させようとしているロバート・ブランドンで
あり、またテリー・ピンカードです。

『精神現象学』に関するピンカードの本には、すでにその副
題に「理性の社会性」と記されています⁴。彼によるとヘーゲル
が、『精神現象学』の中で探求しているのは、「近代の生活と何
とか折り合いをつける」ための「反省的な社会実践の発展史」
（一五—一六頁）なのです。したがってヘーゲルの意義は、と
りわけ近代理論（モデルネの理論）や理性の文化史、あるいは
世界像の社会的基礎づけを生み出した点にあるというのです。
絶対知に関する最終章は、ピンカードの解釈によると、「何が
私たちにとっての権威であり、そして何故これらの『基礎的な
ルール』が権威的なものとして『実際に受けとられ』あるいは
『実際に受け取られるべき』なのかについて、近代の共同体が

与える説明に関する一つの反省」（二六二頁）であるといいま
す。

理性のプラグマティズム的及び社会的次元を救うために、
ヘーゲルの思考から形而上学的次元を——これを私のアメリカ
のある同僚はヘーゲルの「狂乱じみた形而上学」と呼ぶのだす
が——排除してしまうのは、ピンカード（及び多くの彼のアメ
リカの同僚たち）の解釈に特徴的です。近代の理論家としての
ヘーゲルが視野に入ってきたために絶対者が考察から外される
だけでなく、『精神現象学』（そして同時に『法の哲学』が、代
表作へと格上げされているのです——これはかつてカントに関
して、『純粹理性批判』の分析論が彼の「代表作」にされたの
に似ています。それに応じて、当然ながら、ヘーゲルが現象学
自体を彼の体系のほんの導入部として考えていたにすぎないと
いう事実や、そして現象学が現象する知の諸形態を叙述するも
のにすぎず、体系においてのみ表現される現実的な知ではない
という事実はなおざりにされざるを得なくなります。真のヘー
ゲル理解にとって重要な側面がこれによって排除されてしま
うのは明らかです。ピンカードの本への書評の中で、ロルフ・ペー
ター・ホルストマンは数年前に次のように書いています。
「ヘーゲルが哲学の目的と課題であると考えたものを決然と無
視するのでなければ、ヘーゲルの『精神現象学』を近代の理論
として読んだり、この理論をヘーゲル哲学の主要な関心事にす
ることなどできないだろう」。今、こうしたたぐいの批判の声

が高まりつつあります。

これを私が二つの段階に分けたカント受容にたとえると、次のようにいうことができます。つまり、アメリカにおけるヘーゲル受容が直面している状況は、目下のところ第一段階の終わり、そして第二段階への移行期にあるのです。現在ヘーゲルは、アメリカのネオプラグマティズムのテーマと関心に引き付けて理解され、幅広い影響力を獲得しています。このことの傍証として、ヘーゲルの影響力が制度的に定着していることが挙げられます。二十年前、一流の大学がカント哲学の講座を開設したように、いまやこれらの大学は、ヘーゲル研究者のポストを公募するようになっています。数年前までまだ完全に分析哲学の牙城として知られていたスタンフォード大学やコーネル大学やジョンズ・ホプキンス大学などが、現在では同僚の中にヘーゲル研究者を抱えるようになっています。ハーバード大学は何年も前からヘーゲルの専門家を募集しています。カント著作の刊行と並んで、ケンブリッジ大学出版は、いまや大々的にヘーゲル著作の英語版の刊行を始めています。テリー・ピンカードによる『精神現象学』の新訳はちょうど完成したばかりです。

三 ヘーゲル受容の第二段階——始まりの予兆

しかし、第二段階の始まりの予兆も出てきています。これまで、実際にヘーゲルを正しく評価してこなかったという批判的な論調が増えてきているのです。ここでは、再びその兆候を示

すものとして三つの新しい例を取り上げたいと思います。

(一) 近代に関する現象学的な理論にとつて都合がいいように、ヘーゲルの思弁的論理がなおざりにされてきたことを非難し、否定する主張がますます増加しています。アレン・ウッドは一九九〇年の段階でも『ヘーゲルの人倫的思想』⁽⁵⁾の中で、「思弁的論理は死んだ……。私たちに今なお語りかけてくる生きたヘーゲルは、思弁的理論家でも観念論的な形而上学者でもなく、哲学史家、政治理論家であり、私たちの倫理的問題や文化的アイデンティティの危機について考察する哲学者である」(六―八頁)と書いていたのですが、ステイーヴン・ホールゲイトによる新著『ヘーゲル論理学の幕開け』⁽⁶⁾は、まさにこの偏見に終止符を打つべく登場しました。ホールゲイトは、『ヘーゲル論理学の幕開け』の目的は、論理学を取り巻く神話を一掃することと、ヘーゲルの不当にも無視されてきたテキストが、非凡な巧妙さと洞察に富んだ作品であるということを示す点にある」と書いています。

(二) トム・ロックモアは、二〇〇五年に出版された、『ヘーゲル、観念論そして分析哲学』⁽⁷⁾の中で、分析哲学のネオプラグマティズム的なヘーゲル解釈を直接攻撃しました。ロックモアは、彼が「あるがままのものを肯定すること」と呼ぶ形而上学の実在論に囚われている点で、根本的な誤解に陥っているとして、分析哲学を非難しています。ロックモアによると、それはヘーゲルの観念論を無視するどころか、誤解することにもなる

し、同時にプラグマティズム的なヘーゲル解釈がこの哲学の大問題を根本において捉え損なうという結果に陥ってしまうのです。

(ロックモアの本は残念ながらあまりいい本ではありません。極めて攻撃的に書かれており、不確かな記述にあふれているのです。「観念論に対する配慮の不足」が、ブランドンやマクドゥエルに典型的だなどという主張を、おそらく人は認めないでしょう。そればかりか、私にはヘーゲルの立場がしばしば歪曲されているように見えます。これは最近のヘーゲル受容における方向転換に特徴的であるように思えたので、ここで言及したまでです。)

(三) 三つ目の例は最も興味深いものだと思います。第一段階の哲学者たちは、ヘーゲルについて重要であると思われるものが、私たちの今日概念体系の中に何ら損なわれることなく転用されうるという信念を共通に有しています。しかし、ヘーゲルが自らの固有の方法について記述する際に語る「流動する」諸概念や「自己運動する」諸概念は、現代の分析的な概念体系には対応するものがないという事実を、そう簡単に無視することができません。あるいはまた別の例ですが、ヘーゲルの具体的普遍はカントの直覚的悟性やゲーテの直観的思考との共通性を有していますが、ネオプラグマティズム主義者が論文を書く際の論証的一般概念との共通性は有していません。しかも彼らの大多数は論証的一般概念が唯一のものだと考えて

いるのです。そこで、アメリカの哲学者ジェームス・コナントとドイツ文学者デイヴィッド・ウエルベリーは——非論証的な思考方法の研究に関する、大規模で二年にもわたるプロジェクトを実行しました。その研究は、アメリカにおける最も重要な人文科学系の財団の一つである、アンドリュー・W・メロン財団による大規模な財政拠出によって支援されたものです。それはシカゴ大学を舞台に展開され、二つの大きな会議及び複数学期にわたるセミナーから成り立っています。そこには、その都度国外から研究者が招待されました。コナントとウエルベリーはヘーゲルに依拠して研究テーマを次のように表現しています。

「私たちが(ヘーゲルに従って)時に具体的普遍と呼ぶ問題は、ほとんどすべての分野において多くの異なったかたちをとって、生起している……最も一般的なかたちで提起するならば、その問題とは、——個別的非論証的な項目が、どのようにして一般的意味をもちうるのかというものである」。彼らの学際的な背景も相俟って、テーマがあまりにも広範囲にわたって設定されているため、ヘーゲル解釈以外にも、非論証的な思考が問題になり、ゲーテからドイツ観念論を経てヴィットゲンシュタインへと至る歴史的なアーチが描かれることになります。

これは野心的かつ大いに期待のもてるプロジェクトですが、同時に最高の研究組織などから支援を受けています。そうした点から、今日ヘーゲルがアメリカで真剣に受け止められて

いる度合いをうかがい知ることができるとはいいではないでしょうか。

四 フィヒテ、シェリングそしてドイツ観念論の受容

ところで、他の二人のドイツ観念論者であるフィヒテとシェリングはどうなっているのでしょうか。

フィヒテに関していうと、アングロアメリカの世界における彼の哲学の受容は、まだヘーゲルほどには広がっていません。たしかに、フィヒテに関する出版物は、着実に増えています。そして、一九九一年に創立された北米フィヒテ学会は、何といつても毎年大会を組織することができています。ここでの主役はトム・ロックモアととりわけダニエル・ブリージーレです。ブリージーレはまた、毎年自らの手で主要なフィヒテの作品を英語に翻訳し、絶えずフィヒテを宣伝してきました。彼はアメリカのラインハルト・ラウトです。したがって、アメリカにおいてフィヒテにも関心が高まっているのは、まったくもって彼のおかげなのです。こうして近年フィヒテに関する興味深い研究書がいくつか出版されました。例えばフレデリック・ノイハウザーの『フィヒテの主観性理論』（一九九〇年）^⑧です——これは彼にハーバードにおける助教授のポストをもたらししました。それによってこの有名大学において、フィヒテを一流に仕立て上げたのです。一九九七年にはウェイン・マーティンの『観念

論と客観性——フィヒテのイエナ時代のプロジェクトを理解する』^⑨が著されました。一九九八年にケンブリッジ大学出版会から刊行されたギュンター・ツェラーの『フィヒテの超越論哲学——知識と意志の本来的二重性』^⑩もその一つです。

最近、卓越したアメリカの倫理学者であるステイヴン・ダーウォールもフィヒテに取り組んでいます。その際、分析哲学者たちの関心を引いたのは、さしあたりフィヒテの主観性の理論でした。そこから、現在アメリカで幅広く行われている研究領域である、デイヴィッド・チェインバーズなどの意識理論に関する新しい研究との数多くの潜在的な共通性も生じてきます。フィヒテがヘーゲルのような広範な影響をアメリカにおいて確保するのにこれで十分かどうかは、今後の成り行きを見守るよりほかありません。

シェリングはこれまでのところ、アングロサクソン文化圏において、最も受け入れられていないドイツ観念論者です。たしかに何人かのアメリカの哲学者は、一貫してシェリングに取り組んでいます。——特にミルウォォーキーのマルテック大学に所属するマイケル・ヴェイターを挙げることができます。——しかし、その数は、割合としてはまだまだ少ないのです。北米のシェリング学会は、これまでのところまだ存在しません。そして今のところ、シェリングの著作については、最も重要なもののみが英訳されているだけです。

ただ、二〇〇三年以来、シェリングが中心的な役割を果たし

ているある学会が存在します。この最新の学会は北米の「ドイツ観念論学会」で、毎年アメリカ哲学会の大会において、個別の会議を開催することができています。オレゴン州ポートランドのルイス・アンド・クラーク大学に本拠地があるこの学会は、私の見るところ、今日アメリカにおいてドイツ観念論がいわば「命脈を保ちかつ盛ん」であることの象徴なのです。しかし他方でそれは、個々の観念論者たちが、それだけで、いわばばらばらに研究されてきた時代が終焉を迎え、代わりにカントからヘーゲルへとという思想の流れ全体に視線が向けられる時代の兆しでもあるのです。——と同時に、哲学史において何がドイツ観念論をかくも特殊な現象たらしめているのかという点についても、目が向けられる時代の兆しでもあるのです。

註

二〇〇六年三月二八日から二九日にかけて、ドイツ観念論研究会の主催により大阪大学中之島センターにて「日独哲学シンポジウム」が開催された。この論文は、その中でエックハルト・フェルスター(Eckart Förster)氏によって行われた講演 *Der deutsche Idealismus aus der Sicht der USA* の講演原稿の翻訳である。

なお、本文中の書籍等の邦題並びに文献に関する注釈はすべて訳者によるものである。また訳文中の見出しはすべて、訳者による補足である。

- (1) Paul Guyer, *Kant and the Claims of Taste*, Harvard University Press, 1979.
- (2) Michael Friedman, *A Parting of the Ways: Carnap, Cassirer, and*

- Heidegger*, Open Court, 2000.
- (3) Kenneth Baynes, James Bohman, and Thomas McCarthy (eds.), *After Philosophy: End or Transformation?* The MIT Press, 1986.
- (4) Terry Pinkard, *Hegel's Phenomenology: The Society of Reason*, Cambridge University Press, 1994.
- (5) Allen W. Wood, *Hegel's Ethical Thought*, Cambridge University Press, 1990.
- (6) Stephen Hougate, *The Opening of Hegel's Logic: From Being to Infinity*, Purdue University Press, 2006.
- (7) Tom Rockmore, *Hegel, Idealism, and Analytic Philosophy*, Yale University Press, 2005.
- (8) Frederick Neuhouser, *Fichte's Theory of Subjectivity*, Cambridge University Press, 1990.
- (9) Wayne Martin, *Idealism and Objectivity: Understanding Fichte's Jena Project*, Stanford University Press, 1997.
- (10) Günter Zöllner, *Fichte's Transcendental Philosophy: The Original Duplicity of Intelligence and Will*, Cambridge University Press, 1998.

(Eckart Förster: ジョンズ・ホプキンス大学(バルティモア))
(訳 おがわ ひとし・徳山工業高等専門学校)